

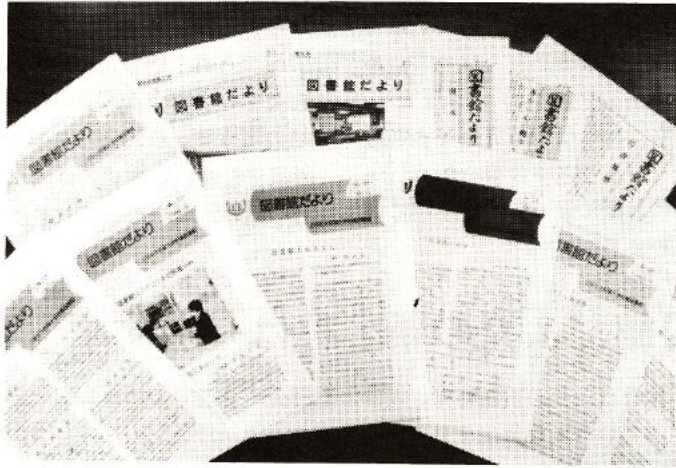
No. 20

1993. 12

# みすず

上田女子短期大学附属図書館報

## ◆◆ 図書館だより 創刊20号記念号 ◆◆



### 20号にあたって

「図書館だより」が20号となりました。いわば、ひとつの節目を迎えることになりました。

本学が上田女子短期大学として発足した、その翌年の1974年、12月に創刊、以来毎年12月この刊行を続けて、20号となりました。

20号に至る各号は、図書館、図書（資料）や情報と、それらの利用や読書等について、その年々の教職員、学生の寄稿により刊行してきました、この間の当館がめざし、希求したところや歩みを読み取ってもらえるものともなっています。20号という節目の号の刊行にあたり、当館の21年および「図書館だより」の20年の歩みを、年表にまとめると、本号3ページ以下に掲載のものようになります。県内の他の短期大学に先駆けての独立館舎建設、コンピュータ導入による図書館業務機械化、学術情報システム

### 館長 山口 吉宗

利用、検索用端末機の利用者への開放、その他、施設および活動の改善に実を上げることができました。大学当局、教職員の支援、協力に謝意を表す次第であります。

一般に、この20年 — 社会の変容や学術の進歩は、まことに急激とか顕著いわれるものでありました。進展の度を加えるばかりの情報化社会にあって図書館活動は変革を続けて行かなければなりません。このたび、当館の節目の一つのこの機にあたり、当館が今までに築いてきたもの、また、そのために尽くされた方がたの労をしのび、今後、大学図書館として果たすべきことに、常に思いを致して、これまでの成果のいっそうの拡充、および新たに進展を図るべきことに、ことさらに取り組んでいきたいと思えます。

## 《20号によせて》

## 図書館の匂い

学長 京極興一

私の中学・高校時代は戦中・戦後の混乱期でしたから、教室での勉強は中途半端、まして図書館で本を読むことなどほとんど経験しませんでした。大学生になって、最初に図書館に入った時、ああこういう世界もあったのかと驚いたことを思い出します。しかし、その図書館の高い天井、暗い電灯、小さな窓、よどんだかび臭い匂い等々の陰鬱な感じは、私を圧迫し、落ち着かなくさせました。やりきれなくなつて、あの悪魔のメフィストフェレスの

一切の理論は灰色で、緑なのは黄金なす生活の木だ（ゲーテ「ファウスト」第一部）  
という甘美な誘惑の言葉に乗って、盛り場に飛び出したこともありました。

その後、教師になってしばらく経ったころ、ペギー葉山の歌声が流れました。

秋の日の図書館の ノートとインクの匂い  
枯葉の散る窓辺 学生時代

私は、なんと爽やかな図書館だろうと、過ぎ去った学生時代を思い、羨ましさを感じました。

それから今年、本学の図書館に親しむことになりました。本学創立から二十年、独立棟として建てられてから十四年の歳月を経た端正なたたずまいと安らかな雰囲気は、歌声の中の図書館のようで、ほんとうに嬉しく思いました。この図書館が、学生の皆さんにとって将来の懐かしい思い出の一コマになればと願っています。

## 図書館だよりの新名称は「みすず」に

先に公募した図書館だよりの新名称は、先日の委員会にて選考の結果、国文科の西山秀人先生の出された「みすず」という名称に生まれ変わることになりました。

みすず … は古来より信濃にかかる枕詞として有名で、「み」は美称の接頭語、「すず」は篠竹（すずだけ）のことをさし、「三薦刈」「水薦刈」と表記されたりもしています。信濃にすずだけが多く産していたことからつけられたとされています。

「万葉集」や、俳人一茶の「父の終篤日記」等にも記述がみえ、「みすず」は、ここ信州の上田女子短期大学附属図書館報の新名称としてふさわしい名称といえます。当図書館報「みすず」が今後ますます内容豊かに発展していくことができれば幸いです。

なお、シンボルマークは幼児教育科1年生の多田瞳さんが応募して下さったデザインを基に山本秀麿先生にアレンジしていただき、左記の様なデザインに決定しました。図書館の新着図書等様々な場面で使用していただきたいと思います。皆さんの御協力に感謝致します。



## ◆◆◆目


## 次◆◆◆

20号にあたって …… 館長 山口吉宗… 1	鱒(ごまめ)の歯ぎしり …… 福田芳典… 16
図書館の匂い …… 学長 京極興一… 2	本との出会い …… 永山智恵子… 18
附属図書館20年の歩み …… 3	本の魅力 …… 塚田実由季… 19
姑と私の生活ゲーム …… 犬飼 己紀子… 10	本との出会い 図書館との出会い 小林ゆみ… 20
聞き取り調査の効用 …… 木村勝彦… 12	“本”の音 …… 市川可奈子… 21
研究書の将来を思う …… 西山秀人… 14	【図書館ガイド】 …… 22


# 附属図書館20年の歩み

付・「図書館だより」20号まで

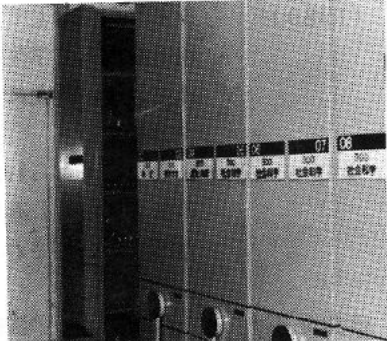
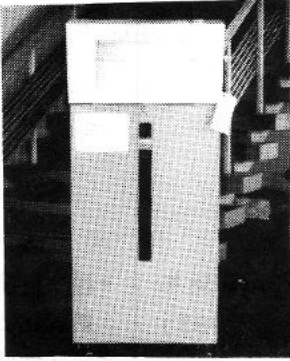
本号は、「図書館だより」が昭和49年に創刊されて以来20号に当たります。附属図書館の20年をふりかえってみるとともに「図書館だより」の今までをたどってみました。




年度	主な事柄	図書館だより
昭和48年 (1973)	<ul style="list-style-type: none"> <li>上田女子短期大学発足 蔵書 10,602冊</li> <li>図書館長 鈴木鳴海(学長兼務)</li> <li>専任司書1名にて開館(20番教室)</li> </ul>	 <p data-bbox="843 1033 1035 1062">発足当時の本学校舎</p>
昭和49年 (1974)	<ul style="list-style-type: none"> <li>図書委員会 発足</li> </ul>	<p data-bbox="802 1130 1049 1159">「図書館だより」創刊</p>  <p data-bbox="871 1516 1077 1545">旧図書室(現20番教室)</p>
昭和50年 (1975)	<ul style="list-style-type: none"> <li>溝上泰子教授より全集もの4セット 約60冊寄贈される</li> <li>兼務職員1名増員</li> </ul>	<p data-bbox="775 1574 1173 1603">第2号 溝上先生寄贈図書案内掲載</p>
昭和51年 (1976)		<p data-bbox="775 1738 857 1767">第3号</p>

年度	主な事柄	図書館だより
昭和52年 (1977)	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏休み期間に館内拡張工事行われる。現理事長室が書庫、現音楽研究室が事務室、20番教室は閲覧専用となる。閲覧席数も40席増設され、倍増の80席となる。</li> <li>在学中亡くなられた原田もと美さんの御遺族から全集もの(約10万円)寄贈される。</li> </ul>	第4号 スタイルを替え、横組とする。頁も12頁に増頁。
		
	改裝後の閲覧室(現20番教室)	
昭和53年 (1978)	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生クラス代表者と図書委員会の話し合いを持つ(図書館に対する意見、要望を聞く)</li> </ul>	第5号 図書館の利用ガイドを掲載する。第1回は「目録規則と本学図書館」以後毎年テーマを替え掲載。
昭和54年 (1979)	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月20日校舎前庭に理事長を迎えて図書館建築工事地鎮祭行なわれる。</li> <li>55年1月24日独立図書館完成移転開館。延べ床面積736,04㎡鉄骨造地上2階建。</li> <li>移転開館準備のため、12月15日～1月23日の間閉館。蔵書・書架の運び込みを実施。</li> <li>1月24日新図書館開館式挙行。新館利用のためのガイダンスを行う。蔵書約20,000冊となる。</li> </ul>	第6号 新図書館の完成予想図等掲載。
		
		建築中の図書館
		
		完成された新図書館

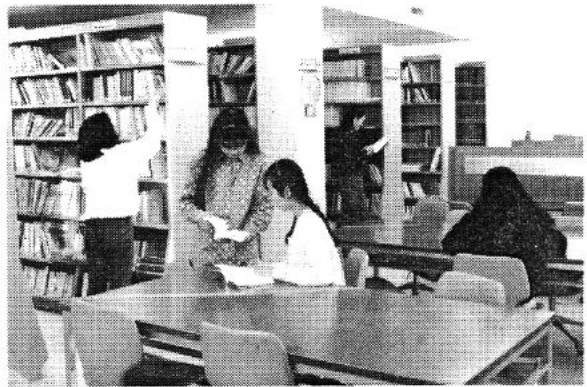
年度	主な事柄	図書館だより
昭和55年 (1980)	<ul style="list-style-type: none"> <li>4月 新入生オリエンテーションにスライドを使用してガイダンスを行う 利用案内も「学生ガイドブック」から独立させ、新たに「図書館ガイドブック」を発行</li> <li>在職中亡くなられた長井保教授(英語)の御遺族から「赤い鳥」復刻版(約28万円)が寄贈される</li> </ul>	第7号 新図書館の概要と機能の特集
昭和56年 (1981)	<ul style="list-style-type: none"> <li>7月 初めての図書館利用調査を全学生に実施</li> <li>須永図書委員長から数百冊の図書寄贈される このうち多数の文庫本、新書本が現在の自由文庫の基となり今日に至る</li> <li>ゼロックス導入 コピーサービス開始</li> <li>国文科開設準備のため、購入図書リスト作成始まる</li> </ul>	第8号 図書館利用調査特集号
昭和57年 (1982)	<ul style="list-style-type: none"> <li>国文科開設準備 新学科用専門図書約7,000冊購入 整理</li> <li>10月 文部省の現地審査を受ける 開設に向け閲覧室と書庫の大移動を行う</li> <li>北村達三教授(英語)から約200冊の図書寄贈される</li> </ul>	第9号 
昭和58年 (1983)	<ul style="list-style-type: none"> <li>国文科開設 新館長に清水正男教授就任</li> <li>専任職員1名増員(計2名に)</li> </ul>	第10号 4頁増頁計16頁に

国文科開設のために準備された関係図書

年度	主な事柄	図書館だより
昭和59年 (1984)	<ul style="list-style-type: none"> <li>蔵書の増加に伴い書庫に移動集密書架（スタックランナー）購入、移転作業実施 蔵書約30,000冊となる</li> </ul>	第11号  書庫内の集密書架
昭和60年 (1985)	<ul style="list-style-type: none"> <li>視聴覚資料（ビデオ・CD）の購入を始める</li> <li>西尾光一学長 菊池志げ子教授から多数の図書が寄贈される</li> </ul>	第12号
昭和61年 (1986)	<ul style="list-style-type: none"> <li>コンピュータ化計画検討始まる</li> </ul>	第13号
昭和62年 (1987)	<ul style="list-style-type: none"> <li>コース制導入実施 司書課程開設</li> <li>視聴覚用ブース2台開放、ビデオ、CDカセット等の視聴サービス開始</li> </ul>	第14号 ガイド「コンピュータ化計画」特集
昭和63年 (1988)	<ul style="list-style-type: none"> <li>閲覧室に冷房装置設備 夏季の利用快適になる</li> <li>ブックリターンボックス（返却ポスト）設置</li> <li>北野次登理事長から美術書を中心に約150冊の図書寄贈される</li> </ul>	第15号  図書返却ポスト
平成元年 (1989)	<ul style="list-style-type: none"> <li>図書館 コンピュータ導入 データの入力業務開始する</li> <li>司書課程履修1年生 実習開始</li> </ul>	第16号

年度	主な事柄	図書館だより
平成2年 (1990)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• コンピュータによる貸出返却業務を開始 本稼働に当り稼働開始式(テープカット)を行う 合わせて「図書館ガイドブック」全面改訂(イラスト入りのコンパクトな形に)</li> <li>• 外部データベース取り込みによる受入業務開始(国立国会図書館蔵書データ…J-BISC)</li> <li>• 西尾光一学長から国文学関係図書約600冊が寄贈される</li> <li>• 蔵書40,000冊となる</li> </ul>	<p>第17号 図書館コンピュータ化特集 ガイド「コンピュータについて」解説</p>
		
		<p>コンピュータ本稼働に当って テープカットする学長・館長・理事</p>
		
		<p>システムについてデモンストレーション の画面に見入る教職員</p>
平成3年 (1991)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 図書館利用調査実施</li> <li>• 視聴覚用ブース2台増設(計4台に)</li> <li>• 外部データベースとオンライン接続(国文学研究資料館等)</li> </ul>	<p>第18号 図書館利用調査結果 掲載 (1981年と比較)</p>
		
		<p>視聴覚用ブースが4台に</p>

年度	主な事柄	図書館だより
平成4年 (1992)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 清水正男館長退任 山口吉宗教授館長就任</li> <li>● 玄関ロビーのロッカー3台更新</li> <li>● 書庫内蔵書の収容力限界のため家政科関係図書を中心に約4,000冊を除籍処分とする 合わせて一部の雑誌・新聞等を処分</li> </ul>	第19号 館長挨拶 コンピュータ検索について解説
平成5年 (1993)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● コンピュータシステム大幅バージョンアップされ、ネットワーク化完成 ホストコンピュータ中心に端末3台が同時処理可能となる 合わせて利用者用検索端末機開放</li> <li>● 外部データベースオンライン接続(学術情報センター…NACSIS-IR登録)</li> <li>● 機械化計画5年目にして全蔵書全資料のデータ入力完成</li> </ul>	第20号 創刊20号記念特集号発行 誌名を「みすず」と改題する



現在の閲覧室





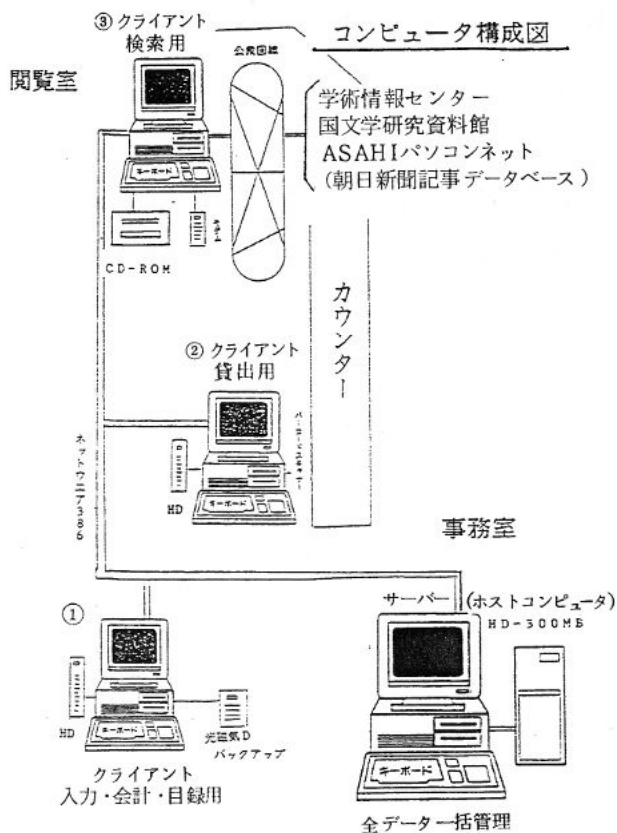
## ◆◆◆ コンピュータシステムの完成 ◆◆◆

平成元年度に導入した図書館のコンピュータシステムは、本年11月、全図書資料のデータ入力が完了しました。

導入当初から比べるとクライアント（端末数）も増え、さらには学術情報センターや、国文学研究資料館等とデータベースのオンライン検索も可能となりました。

学生の皆さんにも3号機（クライアント検索用）を開放してありますので、大いに利用しましょう。

右の図に現在のコンピュータ構成図を示しました。



### ◆ 本学の先生方の新刊紹介 ◆

#### ◆ 「国語」とは何か

京極 興 一 著  
東苑社刊 一九九三・二  
二、八〇〇円

「国語」という言葉の成立、日本人の国語観の特質と研究・教育・政策に与えた影響等を考察したもの。

#### ◆ 一茶大事典

矢羽 勝 幸 編著  
大修館書店刊 一九九三・七  
六、一八〇円

一茶の生涯と作品を見渡せる平易にして簡便な書物（信濃毎日新聞評）

#### ◆ 長野県俳人名大辞典

矢羽 勝 幸 編著  
郷土出版社刊 一九九三・一〇  
二四、八〇〇円  
信州ゆかりの俳人一七、〇〇〇人を一挙収録、代表句一四、〇〇〇句、七〇〇点の出典に基づく貴重な郷土資料



## 姑と私の生活ゲーム



犬飼 己紀子

82歳になる姑が毎日手にする本がある。黒い表紙も白茶けた、分厚い「聖書」だ。3度の食事の前には感謝の祈りを欠かさず、そして午前と午後の2度静かに聖書を読んで一日を過ごす。いつ頃どんなきっかけで教会に脚を運ぶようになったのか、話そうともしないし、誰も知ろうともしない。そのぐらい静かにそして自然に我が家に溶け込んでいる母の信心である。嫁いで間もない頃、日曜学校への送迎は私の仕事だった。その頃から比べると、丸く小さくなった背をソファーに沈め、聖書に目をおとす。小さく穏やかな姿になっているものの、変わらずに続いている母の習慣である。

そんな母も病気には勝てず、これまでいく度か入退院を繰り返している。数年前、ある退院後の数ヶ月、家人の勧めにもかかわらず聖書を手にしないう時期があった。自宅での療養、リハビリも順調であったのに、気力がもどらない。表情に乏しく生活のほとんどを周囲のものに促され、それに対しては極めて柔順に従うといった日々が続いた。元来、気丈でしっかり者の母の変容に周囲が悲しがり、夫の兄弟が我が家を訪れる機会も増え、そしてなんやかやと私の周辺がいつそう気ぜわしくなった。

日々の世話をするものにとって、時折訪れ、心置きなく援助してくれる兄弟姉妹は、ありがたいものである。しかし、頼ってばかりでは我が家に変化は起こらない、何かを始めてみようと考えたとき、「聖書」が頭に浮かんだ。ソファーに座った母を前に、聖書を読んであげようと提案したのだ。

賢い母は感謝の意を現し手を合わせ、一日のうち数分を私の声に耳を傾けてくれる日が続いた。押し売り援助の聖書朗読作業はさらにエスカレートし、朗読をテープに吹き込み、私が留守になる日はこれを聞くようにとカセットデッキまでプレゼントした。厚かましいことをしたものである。これまで手を合わせるものといえば、おてんと様とご先祖様、それにお客様(サービス業一家に育った)だけといった、無信心の私である。おそらく活字だけを追う、味気のない朗読が流れていたであろう。

幸いその後の母は徐々に回復し、そして目を見張るまでに元気を取り戻し、今では少々耳のとおい舅への通訳役として、耳を覆うほどの大きな声で話をし活躍をしている。そんな姿を見るにつけあの時私は、母のために何かをするという名目で実際は自分が思ったように、つまり自己満足のために行動していたのではないかと今振り返っている。

さて、年齢相応の健康を取り戻した母は、あまり自由の利かない体を相変わらずソファーに沈め読書、新聞、テレビに余暇時間を費やしている。それに加えて外交家の舅の持ち帰る話を情報源として世相はもとより隣近所の様子、近所の菓子屋で売っているカステラの値段まで、と実に多くの情報を持っている。そして、目が利き、耳が利く健康体であるから、家族が居間でうろうろすると、目に入る気になる一挙手一投足の世話を焼く代表的なおばあちゃんに変貌した。

人間関係とは実に興味深い、相手が変わるとこちらも変わる。なんとも主体性に欠ける生活態度だと反省するが、まるでゲームをしているような気にさえなってくる。ゲームの最初の一手は、気力を戻す為の「押し売り聖書朗読」だったわけだが、次の狙いは孫達に向ける視線だけでも少々和らげる上手い手はないものである。やはり聖書かな、しかし今では祈りの時間と習慣を取り戻している母に今度はなにを、と考えているところへ、「これはどうかな」と本を貸して下さる方がいた。『NTD新約聖書註解1マルコによる福音書』『ATD旧約聖書註解雅歌・哀歌・エステル記』の2冊。以前にも確か「教会の先生に頂いた。」と言いながら、私には難しすぎる冊子を読んでいた。文学や歴史ものには一切見向きはしないが、これならいけるかも知れない。と喜んでお借りすることにした。持ち帰り、さっそく貸して下さった方の話から始まって2冊の本を差し出すと、「へえーお借りしているの？」と本を手にして翌日からページを開いていたようだ。時折目にする様子は、開いたままの本を手を、日溜まりでうたたねをする姿である。足音高く入っていくと顔を起し、「だらしがないね、読んでると眠くなってしまった。」と笑っている。が、確実に読み進んでいる本を見るにつけ「敵も然る者」とその都度驚かされていた。

世間では、近頃60歳代以上の女性が忙しいそうである。家事・育児・夫の世話から開放され、まとまった余暇時間を獲得できるようになった女性が独り歩きし始めた。旅行会社のターゲットにされるほどの勢いである。旅行・趣味・カルチャーにと、家内から家外への脱皮であろうか。何かを求めている知識欲を感じずが、そこで得た事が日常生活でどれほど活かされ、自己発揮がされているか、はまだ疑問と思っている。

余暇には次の三つの機能があり、これを balan

ンスよく組合せて個人の生活に取り入れていくところそ豊かな生活創造に欠かせぬことと言われる。

#### ①休養 ②気晴らし ③自己開発

60代以上の女性層に限らず、自己開発を気取った、脱日常的な気晴らしの為の余暇活動の過ごし方にとどまっている多くの現象に寂しさを感じる。そして、それをあおり立てるあふれるほどの情報にも眉をしかめたくなる。

そんな私自身は、「溢れる情報を有効利用し、温泉大好き、カラオケ大好き、そして創造的活動も楽しんでいます。」と、言い切りたいのだが…。

さて、我が姑は日常に溢れる余暇を、①休養(昼寝)②気晴らし(家族との係わり)③自己開発(読書)にと、充実して過ごしている。2冊の本を借りてから6ヶ月が過ぎようとしている。実のところ、この原稿の枀を埋めながら、まだ読み続けているだろうかと少々不安だったのだが、手が止まっていた原稿にオチを付けてくれるかのように、出張から戻った私に「あの本読み終わったから、カバーを替えてお返ししてね。」オドロキ、モモノキ…。

グットタイミングである。

おかげで原稿書き上がりました。

脱帽。

私よりずーっと上手の母でした。

さあーて、次なる手は何としましょうか。

孫達への小世話焼きは相変わらずだけれど、何かが変わったような気がしている。変わらぬ大人をおいて子供たちが成長したようである。生産的でない私の一手は、やはりゲームの域を出ない戯事のようなのである。

(助教授)





## 聞きとり調査の効用



木村勝彦

私は、現在、教職関係の授業を担当しているが、学部は教育学部ではなく、いわゆる文学部の史学科にあたるところに所属していた。はるか昔のことになるが、卒業論文は中国古代史の異民族王朝についてのものであった。とはいってもそんなおおげさなものは書けるわけではなく、資料を読んで訳しただけのようなものであった。ただ、その過程で勉強というものは机に座って行うものではなく、むしろ足を使って行うということが分かったことだけでも大きな収穫であった。どんなに大きな大学であっても全ての書物・資料等が揃っていることはありえない。自分が欲しいと思った書物、ことに専門書、資料などの場合、すぐに手近の図書館で見つかるということはあまり期待できない。そうすると他の図書館、あるいは資料館等に出向くということになる。たった一冊の本を手に入れるために一日かけて出かけたこともある。ひどい時には、参考になるかと思ってわざわざ茨城県の片田舎から国会図書館まで探しに行った結果、手に入れた論文（と思っていたのだが）が見開き2頁のスローガンに終始するようなものであったということもあった。

しかし、逆に苦勞して思い通りのものが手に入った時の喜びは大きく「これを持っているのは日本では俺だけか。」という変な優越感に浸ったこともある。

大学院に入学後は教育のことを勉強することになったが、そこではそれまでの書籍中心の資料収集から新たにインタビューを行って証言をとると

いう方法を知った。というのは勉強の対象を第二次世界大戦直後の教育実践を調べることにしたために、資料が当時の印刷事情から十分に公刊されずに生のまま残っていることが多かったからである。また、時期的にも当事者が存命している場合が多く、そうすると直接に会って話を伺う以外にはない。

大学院の3年生の時にはそのような事情から、戦前から戦後にかけて教員として活動された方、あるいはその御家族にインタビューを行う機会を何回か持つことができた。しかし、インタビュー調査とはいっても、それまでに社会学的な調査方法を学んだわけではなく、適当な本を読んで、やり方を自分流に解釈して行ったためにあとで聞き落したことなどもあった。

ただ、そうはいってもインタビューには楽しいこともあった。一つは調査という言い訳を自分なりにつけて見知らぬ土地を歩き回れることである。これは人に対しての言い訳だけではなく、自分自身に対しても「ここをぶらついているのは遊んでいるのではない。研究のためだ。」などと言い訳ができることである（実際はぶらついていることが多かったが）。そして、もうひとつは調査対象の方とお話ができることである。これは当初は非常に緊張した。今頃昔のことを思い起させるのは却って迷惑ではないか、また、十分に話を聞かせてくれないのではないか、などと心配したものである。しかし、大体的場合、そのような心配は杞憂に終わった。というのは終戦直後の教育実践を評

価値する場合、戦争からいかに立ち直って日本の教育を再生したかという肯定的な聞き方になるからである。人には思い起したくない過去のでき事の一つや二つがある。たまたま研究の関係からそのようなことには触れることはなかったのである。さらに付け加えるならば、これは偶然のことではあるが、インタビューを行った方が人の良い方ばかりであり、こちらの方針を積極的に理解して対応して下さったからである。

こんなこともあった。大学院の3年生の夏に青梅に住んでられる元小学校教諭のU先生にインタビューを試みたことがある。個人的に当事者にインタビューをするのが始めてであったため、U先生の自宅の玄関に入るまでは非常に緊張した。しかし、U先生がまずにこにことした表情で出てこられたことで一安心した。そしていろいろと話を進めていくうちに、逆に研究対象として話を聞かせていただくことは御本人にとっても嬉しいと思われていることに気がついた。考えてみれば、自分が長い時間をかけて取り組んできた仕事についてインタビューを受けるということは、自分の仕事が評価されていることになり、よほどの失礼がない限り、好意的に受け取ってもらえるものである。その日、U先生には非常に喜んでいただいて、インタビューが終わった後も、初対面の私にお寿司を御馳走して下さり、またビールをたらふく飲ませていただいた。当日は東京の友人の家に泊めてもらうことになっていたが、夜遅く酩酊状態で友人宅に帰りついたため、その様子を見た友人に「お前は今日、研究調査で青梅に行くといっていたのになんで酔っ払って帰ってきたのか。」とあきれられてしまった。

その他にも数人の方にインタビューをしたり、資料をお貸しいただいたりしたが、私の出会った限りでは、皆快く対応をして下さり、いやな思いは一度も無かった。また、U先生を始め、数人

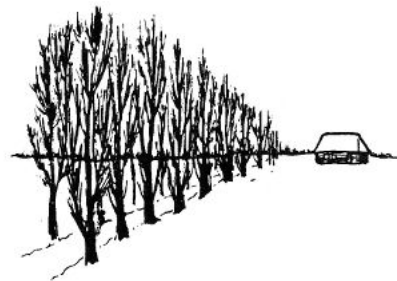
の方とは今でも年賀状等で近況をお知らせしている。

こうしたことが可能であったのは、一つには大学・大学院という人生の中で最も時間が自由になる時期を持てたということと、勉強しなければならないが、机に向かい続けるのは苦痛であるという自分の性分がうまい具合に一致したからであると思う。

自分の思いどおりの情報を探すというのは、始めは非常に面倒くさい。しかし、一度うまくいくとそれは完全に自分のものになる。そしてそれをもとに次から次へと情報が広がって行くことになる。それは本を読んでいるだけでは得られないものである。

最後に教訓めいたことをたれるが、現在では、図書館どうしのネットワークが以前に比べて非常に発達してきている。本学の図書館は総合大学に比べてみれば規模としては小さいが、情報網を使えばそれに比しただけの有効活用は可能である。それから様々な道が広がってくるであろう。学生諸君は、どうせ授業料を払っているのなら、それだけもとをとるという意味でもっと積極的に図書館を利用してはと思うが、いかがか。特に図書館に関してはただ、本が沢山あるというだけではない。むしろ、日本全国の情報窓口として利用してみたらと思う。

(講師)



## 研究書の将来を思う



西山 秀人

現在我々が書店や出版社などから買い求める“本”は、売る側の論理でいえば商品以外の何物でもない。不朽の名作であろうと某タレントの写真集であろうと、非売品でない本はすべて商品という名のもとに統括され、販売されるのである。そのレベルにおいていえば、研究書というのは一般の書籍や雑誌とは異なり、マーケットがごく一部に限られた、きわめて特異な商品であるといえよう。端的にいえば、研究書は私も含めた少数の研究マニアのためだけに作られているのである。そのような贅沢な商品であるからには、一般書籍にくらべて値段が割高なのはしかたがないことかもしれない。しかしながら、近年における研究書の異常なまでの高騰ぶりは、研究者にとってすでに我慢の限界に達しているといってもよいだろう。

たとえば、国文学の分野では『～論集』『～講座』といった叢書物を除けば、300頁ほどの新刊の研究書が大体8,000～10,000円弱といったところが相場のようなようだ。したがって、1,000頁を越えるような大著であれば、定価は30,000円を軽く超えてしまうわけである。ちなみに、今手元にある村上春樹の新作『国境の南、太陽の西』（平成4年・講談社刊・四六判）は294頁のハードカバー本で定価1,500円（税込）である。むろん、文芸書と研究書の価格を比較してそのよしあしを云々できるものではないが、一般的感覚からすれば今の研究書の価格はとても尋常なものとは思えない。

なぜこんなにも研究書が高いのか？

当たり前なことではあるが、その第一の理由は発行部数が少ない点にある。仮に製作費がハードカバーの文芸書と同じであったとしても、研究書の

場合は多くても200部程度しか製本されない。それを原価計算して値段をつけるのだから、とんでもなく高い本になるわけだ。

また、角川書店や岩波書店のような大手出版社は別として、学術書だけを手がけているような中小出版社の本は、一部の特約店を除けば一般の書店に出回ることがほとんどない。大体は出版社直販という形で売られるのである。出版社からは年に数回は出版目録や新刊案内がダイレクトメールで送られてくるので、買い手にとってさして不便はない。しかも、代金は現物を受け取ってから郵便振替か銀行振込でゆっくり支払えばよいのであり、出版社と馴染みになれば“ツケ”もきくのだから、ずいぶんと親切なことである。しかし、一方ではこうした信用商売的なやり方が、出版社の資金繰りに大きな支障をきたしていることもまた事実であろう。それが結果的に研究書の高騰に拍車をかけることにもつながるのである。

さらに、昨今のコピー文化は研究書の売り上げに多大なダメージを与えている。たとえば、今ここに定価が30,900円（税込）の研究書がある。頁数は目次・凡例・跋などを含めて計1,026頁だが、仮にこれを近所のコンビニエンスストアの10円コピーで一冊まるごとコピーした場合、その代金はたったの5,130円にしかならないのである。むろんこうした行為が著作権法に低触することは言うまでもないが、切実な状況下にある大学院生や大学生にとって、この方法は破格の安さで一冊の研究書を“所有”できる点においてきわめて有効的なものである。もっとも、入手不可能な古書でもない限り、何も一冊全部コピーしなくても必要な

部分さえあれば当面はそれで事足りてしまう。「最近の学生は本を買わない」とある古本屋の主人がこぼしていたが、複写しなさいと言わんばかりにコピー機が普及している時代に、誰が好き好んで高いと知れた研究書など買おうとするだろうか。

その他、テクノロジーの進歩により印刷形態が活版印刷から電算写植による印刷へと移行したことも、結果的に製作費のコスト高を招き、それが本の価格にも反映することとなった。

高いから買わない、売れないから値段を上げる、というイタチごっこをこのままずっと繰り返していれば、いずれ中小の学術書出版社はすべて倒産するだろう。そうなれば研究者たちは自費出版でもしない限り、まとまった研究成果を公表することができなくなる。つまり、よほどの財力か援助がなければ自分の本が出せなくなるのである。それが学問の将来像を著しく貧しいものにしてしまうことは言うまでもない。

確かに、今の出版社のあり方にはいろいろと問題もあろうが、だからといって出版社を非難するばかりでは事態はいつにも好転しない。すでに一部の研究者の間からは「何とか安く本を提供し、研究情報を等しく分かちあうことは、出版社だけの責任ではなく、研究者も真剣に考えなければならないことであろう」という声が上がりはじめている（伊井春樹・津本信博・新藤協三共著『公任集全積』＜平成元年・風間書院刊＞の伊井氏による「あとがき」より）。その一つの試みとして上著は、「パソコンに入力したデータをレーザプリンタで印字し、それを版下にする方法」をとっている。確かに紙面の体裁等は写植印刷に比べて見劣りはするが、この方法により通常ならば13,000円前後の定価がつく約450頁の本を、8,240円（税込）で売ることが可能にしたのである。

たとえ研究書であろうと、本を出すのであれば誰だって装丁や紙面の体裁を少しでも美しいもの

にしたいはずである。巻頭に和紙を用いて「この本を父と妻に贈る」と記した研究書や、著者近影を据えたものはその一つの典型であろう。そうしたエゴをひたすら自重し、花よりも実をとった『公任集全積』の果敢な試みに私は大きな拍手を送りたい。

近年では原稿を入力したフロッピーディスクを出版社に持ち込めば、電算写植に変換してくれるようなシステムが開発されており、その方法を用いれば若干ではあるが経費を節減することができる。しかし、活字のポイントを変えたり、図表を含む場合は、やはり校正の段階で再度こまごまとした指示を出さなければならず、結局そのために経費がかさんでしまうことになる。もっと根源的なところでコストダウンを目指さなくては、あまり意味がないのである。他に、内容をソフトにして啓蒙書や教科書の類として出版するような方法もとられているが、むろん現在の出版状況を慮った上での妥協策であって、著者の本意ではなからう。

ワープロの文字に拒否反応を示す人もまだ多いが、最近ではワープロの性能も驚くほど向上し、印字の美しさはもちろんのこと、異なったポイントの文字を一度に数種類使用できる“マルチポイント”機能がついている機種も珍しくなくなった。いずれは印刷文字を一字単位で細かくポイント指定できる、本格的なマルチポイント機能が廉価なワープロにも導入されてくるのではないかと期待している。そうなれば一見写植印刷とほとんど変わらないような完成度の高い版下が、自宅のワープロでも作れることになる。その版下を出版社に持ち込むだけの形をとれば、現状の研究書とはほぼ同じ体裁で、価格だけを大幅に下げることができるはずだ。

安く、美しく、そして内容の充実した研究書の出版を実現させることは、これからの研究者に託された大きな課題だといえよう。それに加えて、近い将来再生紙のコストダウンが実現し、印刷紙に廉価な再生紙を使用できれば、環境保護の立場においてもさらに理想的である。（講師）



## 鮮（ごまめ）の齒ぎしり

福田 芳典

「古の学ぶ者は己の為にし、今の学ぶ者は人の為にする。」孔子（B.C 551～B.C 479）のことばである。昔の学生は自己の修養のために学んだが、今の学生は人に知られようとして（名声をうるため）学んでいると。紀元前5.6世紀の頃の若者にも、そして、いつの世も若者には風当りは厳しい。

唐詩の旅という漢詩鑑賞の講座がNHK松本支局にあり、小尾郊一（広島大名譽教授）先生が講師で月二回、楽しいお話を伺っている。過日、談たまたま若者批評となり「此の頃の教育はどうなっているのか。諏訪から松本までの列車の中の高校生のマナーの悪さには驚く。混み合っているも鞆を横の座席においたままで譲ろうともしない」と憤って話された。信越線でも同じ光景にままたま出会うので私も全く同感の思いであった。

松本市内のバスの中、二人の中年婦人が、二人用の座席を一人占めして、それぞれ買い込んだビニール袋を横に置いている。混み合ってきて老婦人がその側に立っても、遂に荷物を動かす気配を見せずじまいであった。中年婦人までも……の思いであった。

◇ ◇ ◇ ◇

『自由主義の再検討』（岩波新書）という新刊書に目がいったのは書評を読んだだけではなく、こうした日常もあったから。著者の藤原保信氏は早大教授で長野県生れとある。あとがきに「（若者の）公共心、連帯心の欠如は人間としてもっとも大切な何ものかが奪われた状態であるかもしれない。」「もっとも、われわれは、今日の若者のそのような状態を、たんに若者の責任とすることは

できないであろう。……むしろ、公共心を失い利己主義なのは日本の社会そのものであるかもしれない。」「本書は、このような状況へのある種の危惧と憤りに発している。」とある。著者は西洋政治思想史が専門であるらしく、自由主義について歴史的検討を加え、更に、社会主義の意義や欠陥をも指摘している。

著者によると「自由主義とは経済的には資本主義を、政治的には議会制民主主義を基本とする社会」で「資本主義が経済における解放＝自由化の原理であり、議会制民主主義が政治における解放＝自由化の原理であるとしたならば、功利主義は道徳におけるそれである。」という。そして「近代の市場社会の成立は、経済を道徳的、政治的秩序から離床させ、そこでは、時に「徳」から「富」へという言葉によって表現されるように、社会的絆である徳は富にとって代われ、せいぜい、むしろ、富の世界をよりよく成立させるための手段的地位に墮していった。」と記し、こうした功利主義の人間観に基づく自由主義社会ではあるが、なお、道徳空間（良心に従い内的充実感に幸福を見出す道徳心豊かな社会）の回復に望みを託すとのべている。

門外漢の私が、更に心ひかれた箇所は、ホッブズが「汝の欲すべからざることを、他人に為すことなかれ」という命題に自然法を要約したという所である。「万人に対する万人の闘争」が自然状態であり、それより逃れるために平和の戒律としての命題。それは更に、平和への努力、他者に許すと同じだけの自由で満足する、契約の遵守、という自然法の発見だったという。『論語』には



「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」と同じ趣旨の言葉がある。しかも、このような同じ人間認識から出発して、ホッブスは自然法を守らせるために、契約による人為的国家に絶対的権力を与え、法による強制に頼らざるを得ぬことを説いた。一方、孔子は「それ恕か。己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」と弟子の子貢の間に答えた。「恕（じょ）」とは相手への思いやりの心であり、それは、人間として一生守るべき大切な心掛けだということ。儒教では、仁とか孝とか忠とか信とかいろいろの徳目を説くが、特に恕は惻隱の情ともいい、人間性の基本とも考えている。これを広げ深めて徳治主義といわれる信頼と愛情に基づいた理想的な世の中の実現が目指されているのである。『大学』には、天下を平らかに治めるために、「絜 矩（けっく）の道（他の人の心を推しはかること＝恕）」が君子に求められている。ホッブスの法による強制に対し、孔子は徳による教化を説くのである。

◇ ◇ ◇ ◇

『孔子』 井上 靖（新潮社）は、先年、野間文芸賞受賞の小説だが、冗長さが目立つと思ったのは私だけだろうか。また、作者の孔子像、孔子解釈ゆえのことだが、その視点に「孝」が欠落していたのは残念であった。「天命」とか「仁」とかについては、この小説の語り手として登場する弟子の蔦葺（えんきょう）をして複眼的に語らせていたのに。

孔子はその人間洞察において、何より価値ある善を人間らしさに置いた。それを「仁」と呼んだ。人間は人間の本性に副って、人間らしく生きること、それこそ自己矛盾のない真の幸福な生き方であり、価値ある生き方であると考えその極致というか最高のものを「仁」と呼んだ。『中庸』に「仁は人なり。親に親しむを大なりとなす」とある。仁の人間らしさは、まず、身近かな親を愛し、

大切にすることであり、それが基本だという。孔子の弟子の有若は「孝弟は其れ仁を為すの本か」といっている。

『論語』にも『韓非子』にも『呂氏春秋』にもでてくる、直躬（ちよっきゅう）一正直者の躬一という人物について、孔子は、親の犯した罪についてはその子供は親をかばって隠す—これを容隠（よういん）という—行為の中にこそ、人情の自然に基づく正直というものがあると説いている。『中庸』に「道は人に遠からず。人の道を為（おこな）いて人に遠きは、以て道となすべからず。」正道を行うといいながら、あまりに人情から遠い行為にでるなら、もはや正道とはいえないといっている。孔子も「仁遠からんや」と。

◇ ◇ ◇ ◇

個人の尊重（憲法13条）と人間の平等（憲法14条）を理念としている近代国家のわが国では功利主義の下、欲望の肯定、自由の横行による道徳の衰退と放縦、思いやりや人間らしさの欠如した権利の主張などにより、従来の美風が失われつつありはしないか。

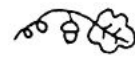
過日、NHKテレビは、三日つづけて、故郷の親の老いをテーマに放映した。高齢化した親の介護をどうするか。親元を離れている子供は介護の気持ちはあるが、できにくい現状の苦悩が描き出されていた。新民法は遺産相続は兄弟均分だが、親の身体を均分して介護はできないと。誰かが介護する。が、誰がが。公的サービス機関に依存するのか。仕事を持っている人の介護の問題である。

井上 靖もこうした社会の中での孔子像ゆえ、「孝」が欠落してしまったのだろうか。私は、三年前、敦煌空港の待合室で、妙齡な中国婦人が中国語訳『孔子』を読み耽っていた姿を思い出す。孝に厚かった嘗ての中国、どんな感想をもったことだろうか。

（兼任講師）



## 本との出会い



幼児教育科1年 永山 智恵子

本を読むことは、私にとってそんなに苦になるとか、嫌いだといったことはないのだが、時間を作ってまで読書をしたいというほど実際のところ好きなわけではない。

しかし、文学や小説といわれるような作品については、知らないというのも話題性がないし、それほど有名な小説なら読んでみたいという思いもあり、本当に少しずつではあるが読むようにしている。

私が今までに読んだ小説で一番印象に残っているものは、知らず知らずその話の中に吸い込まれて、自分が本当にその場面で見ているかのように情景が目の前に見えるようなそんな作品である。もちろんそのような小説は、できる限りの時間を作り、読み終えてしまうものである。

この世の中に数えきれないほどある小説の中から一生のうちで、何冊そのような作品に出会うことができるかは、やはり本を読まないことには見付けられないし、また感動したり、共感したり、影響されたりすることもないことになる。

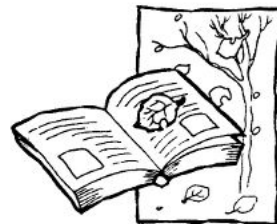
今現在、私達のまわりには、マス メディアが発達しており、ありとあらゆる情報がいち早く入ってくる時代となっている。私が幼い頃には、もうテレビがあるのはあたりまえで、マンガやドラマなど文字を追わなくても目と耳から自然と入ってくるといった生活に慣れている。そのために本を読まなくても物語を知っている場合が多い。映像から受けるイメージというものが、いかに大きいか分かる。物語を知っていてその作品を読む場合には、どうしても以前に見たイメージが頭に浮かんでしまうということが多い。しかし本を読むことによってその物語を新たに組み立て直すこ

とができる。また、テレビでは見ることのなかった場面が、小説の中には事細かに書かれているということもある。

私は映画などを見て、感激したもの、もっとよく知りたいと思ったものは、必ず読むようにしているし、読みたくなる。また著者に共鳴すれば、その方の書いた作品を一通り読むことが多い。

このようなことから、私が本を読むことに以前よりも興味を持ち、またより良い小説に出会いたいという思いから、書店に通うようになった。また自分が好きな著者の新刊が出版されていないかと、新刊情報に目を通したりする機会が増えたように思う。

決して読書が好きなのではないけれど、そんな私でも、今までに印象に残っている本はあるし又これからもそのようなすばらしい本を読むことができるような、そんな本との出会いを見つけていきたい。そして私自身の内面を磨くとともに、様々な考え方を受け入れ参考にできるように利用できれば幸いである。





## 本の魅力



幼児教育科2年 塚田実由季

私はこれまで多くの本に出会ってきました。幼い頃、母がよく絵本を読んで聞かせてくれたり、字が読めるようになった私は、弟と一緒に絵本や図鑑を読んだ記憶があります。

私たちの生活の中で、本と関わる事は多いと思います。気軽に利用できる図書館や書店、友達との会話など様々な形で生活の一部となっていると思います。

私が数々の本と出会い、今でも心に残っている本は、中学生の時に読んだ『星の王子さま』という本でした。世界中を旅していた飛行士が砂漠で出会った一人の男の子。小さな星の王子と色々な星を旅するお話の中で、王子がキツネと出会い「大切な物は目には見えないものさ」とキツネに教えてもらう場面が一番印象に残っています。「本当に大切な物はそんな簡単には見えない。心の目で見えるものである」そんな言葉が中学生の私にとって、印象深く残り、今でも愛読書として読んでいます。

ところで保育の場において、絵本はとても重要な教材だと思います。実習の時、子どもに絵本を読み聞かせしましたが、子どもは真剣に絵本を見ていて、その目はきらきら輝いていました。また子どもは想像性が豊かで、実際に存在しない人物や物を信じたり、どんどん想像をふくらませていく力があると感じさせられました。話の展開を子どもは素直に感じ取り、楽しい場面ではとてもはしゃいだり、悲しい場面では一緒に悲しんだり、絵本に向かって励ましたりと、感受性豊かだと感

じました。子どもにとって絵本は夢を与えてくれるものであると思うと同時に、大人になっても絵本を含む身近にある本は夢を与えてくれるものであると思います。同じ本を読んでも、読んだ人によって感じ方は違うかもしれませんが、本を読んでいて心が落ち着いたり、勇気づけられたり、また共感することは誰でもあるのではないかと思います。

これから私も保育者という立場に立つわけですが、子どもたちに多くの本と関わりをもたせることで、子どもの夢や想像性を育てていきたいと思っています。それには私自身も図書館を利用して多くの本を読むことで、自分が幼いころ描いた夢を思い起こし、感動する喜びを子どもたちと理解できるような保育者になる準備と、残り少ない短大生活をすごしたいと思っています。





## 本との出会い・図書館との出会い



国文科1年 小林 ゆ み

私が初めて本と出会ったのはいつのことだっただろうか。今となっては思い出すことはできません。しかし、小さい頃から本が好きだったことは確かだと思います。現在の私が国文科に在籍している理由の何パーセントかは、幼い頃の本好きが関係していると思います。

私が通っていた保育園では、月に1冊ずつ、園児に本を与えていました。私は本をもらうのがとても楽しみでした。家でも両親が何冊かの本を買い与えてくれました。その本は、昔話の絵本が多かったように思います。そして、それらの本を居間のテーブルに広げて、覚えての平仮名を得意になって読みました。小学校に入学してからも、両親は学校の斡旋をはじめ、何冊かの本を与えてくれました。私は夜眠る前に、ベッドで本を読むのが日課となりました。

その頃読んだ本で印象的なものが1冊あります。中川李枝子作、大村百合子絵『いやいやえん』（福音館書店）です。主人公のしげるはちゅーりっぷ幼稚園のばら組です。しげるは先生たちを困らせる問題児。きまりは守らないし、わがままです。あまりのわがままさに「いやいやえん」に連れていかれてしまいます。他にもしげるは幼稚園でさまざまな事件を巻き起こします。しげるが起こす事件や幼稚園での出来事がとても面白く、何度も繰り返して読んだものでした。

図書館との出会いは小学校に入学してからでした。私の小学校では2年生から図書館が利用できたと思います。記憶にある限りでは、かなり本を

借りていたようです。図書館の貸出しカードが1枚目は白、2枚目はピンク、そして、青、緑、黄色と進んでいくようになっていました。私は早く黄色のカードになりたくて、毎日のように図書館に通いました。また、自習時間などにクラス全員で図書館に行くと、司書の先生が紙芝居を読んでくださることもあり、それもととても楽しみにしていました。

4年生になると児童会の委員会活動へ参加するようになって、私は図書委員を選びました。活動内容には、利用の呼びかけや利用状況の調査の他に当番活動もありました。この当番活動は週1日貸出し、返却の手続きや貸出カードの整理をするものでした。手続きの時にスタンプを押したり、下校時刻が迫った閉館後にカードを整理することを楽しんでやっていました。たまには司書の先生の仕事を手伝うこともあったし、先生から図書についての話を聞くこともありました。図書館はとても広く、蔵書も大変多かったのも、いざ本の整理をする時はとても大変だったことを覚えています。でも、当番活動はとても楽しみなことでした。たった半年でしたが、私の今までの人生の中で、あの頃ほど図書館と仲良くなったことはありません。

あの頃の委員会活動を今でも忘れられず、短大では司書課程を履修しています。これを機会に、中学、高校と次第に足が遠のいてしまった図書館と再び仲良くなれば、と思います。そしていつの日か読書の楽しさを他の人に教えることができたならなあと思い、今日も司書課程の講義に向います。



## “本”の音

国文科2年 市川可奈子

本を買うのはバクチに似ている。

もちろん、立ち読みという強力な作戦もあるが、私の場合これといった目的もなくフラット本屋へ入っていった時に一つの“賭け”が始まるのである。

作家やタイトルで一応のふるいにかけ、そして手に取ってみる。あらずじを読んで、パラパラとページをめくってみる。よし、この本に決めた。レジへ持って行く。恐る恐る読み始める。ここではまだ勝負は決まらない。冒頭文というのが、実はなかなかの曲者だったりするからだ。

一息に終りまでたどり着くものもあれば、ほとんど手垢をつけずに本棚へ直行するような“置き本”もある。

面白い本を読んでいるときはリズムがいい。ただの活字がスルスルほぐれて、生きたことばへと変わってゆく。台詞もちゃんとした音声となってストレートに心にとびこんでくる(気がしてくる)。周りの景色も浮かんでくる(気がしてくる)。

この「気がする」という余韻が欲しくて、また本を手にしてしまうのだ。

しかしつまらない本の場合だとそうはいかない。だんだん文字をたどるのが苦痛になって、リズムが狂ってくる。言葉もただの冷たい活字に戻っていく。だまされたような気持ちで、千円近くもした紙のかたまりを放り出したことは何度もある。

同じ本でも人によって反応が違うから、買われる本の側に立っても、それはスリルがあるだろう。

しかし、どんな本も読まれたくて生まれてき

た、何か共通のものを持っている気がする。

どの本にもある、“文字が生みだす音”

本には音がある。

ページをめくるパラパラという音だとか、落とした時のガタンという音とは違う。何かによってたてられた音ではなくて、本の活字そのものが言葉と話しているような、存在感。

目が文字を拾っていくのと同じ速度で物語は進行する。目を離すと、その物語はピタリと止まる。

本を読むのは、目で音をきいているみたいだ。しかも、不思議なことに、目を離して物語を中断しても、その物語は消えない。誰もきいてはくれないけれど。

読んでいる時、物語は一瞬一瞬心の中で響いている。それだけでなく本を閉じて、誰にも聞かえないところでその物語の全ての瞬間が同時進行していて、それが全部1ヶ所に集められている。本にはそういう不思議な存在感がある。

そういえば、『はてしない物語』という本の中で主人公の少年が似たようなことを言っていた。

「本って、閉じてるときは中で何が起きているんだろうな。そりゃ、紙の上に文字が印刷してあるだけだけど…。」

少年はそうつぶやいて、印刷してあるだけの紙の世界へ入っていった。

紙のかたまりか、一つの世界か。

この差は大きい。

## 【 図書館ガイド 】 ○○○○○★○○○○○★○○○○○★○○○○○★○○○○○★○○○○○★○○○○○

## ◎ 利用者用検索端末機の開放

本年はコンピュータのネットワーク化が実現したことにより、利用者が自分自身の手で検索が試みられるように端末機を開放しました。

時折利用している人がいますが、検索するためにはちょっとした“コツ”が必要です。

まず第一に探し出したい書名を頭から最後まで打たないことです。本学の蔵書に在ればよいのですが、大方の場合「該当データはありません」と出ることが多いのです。

そこで、まず書名をキー毎に切りくずして2～4語の熟語単位でAND検索をかけます。

例えば「ごみから地球を考える」というタイトルの書名を探す場合は①「ごみ」②「地球」として助詞や形容詞は省いて2語のキーワードをAND検索します。すると両者の語の入った図書がすべて検索されますし、時間も早く、その上思いがけない他の本を見つけることも出来ます。

端末機の前に座ったら係にちょっと声をかけて、検索の“コツ”を聞いてから実行してみてください。

## ◎ 学術情報センター (NACSIS-IR)

## 接続によるデータベース検索開始

すでに加入している国文学研究資料館との接続に加えて、この度学術情報センターのデータベースをオンラインで検索するために、NACSIS-IRと接続をしました。探している図書資料の所在はもちろん、雑誌論文のタイトル、掲載雑誌名の判明、所蔵、研究者の研究内容等がオンラインで検索できます。

NACSIS-IRの検索を希望する人は係に申し出て下さい。(こちらは登録番号やパスワードが必要となるため、皆さんが直接検索することはできません。)

## 編集後記

おかげさまで、20号となりました。ちなんでは、20号によせての新学期の玉稿、館および館報の20年の歩みを掲載しました。

大学、図書館いずれもが新局面に入ったこの時代に、ひとつの節目を迎えた館のさらなる充実発展への願いもこめて、館報のタイトルを新たにし、館のシンボルマークも決めました。

心新たに前進。よろしくお願ひします。

(山口)

みすず 上田女子短期大学附属図書館報

第20号

1993.12.10発行

編集 上田女子短期大学図書委員会

発行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-12

長野県上田市下之郷620

TEL 0268-38-2352